新四国相馬霊場 88 ヶ所を巡る会　我孫子市湖北、中峠、下ヶ戸コース

明治 27 年頃の取手と我孫子と利根川の流れ

波切不動明王像

高野山南院

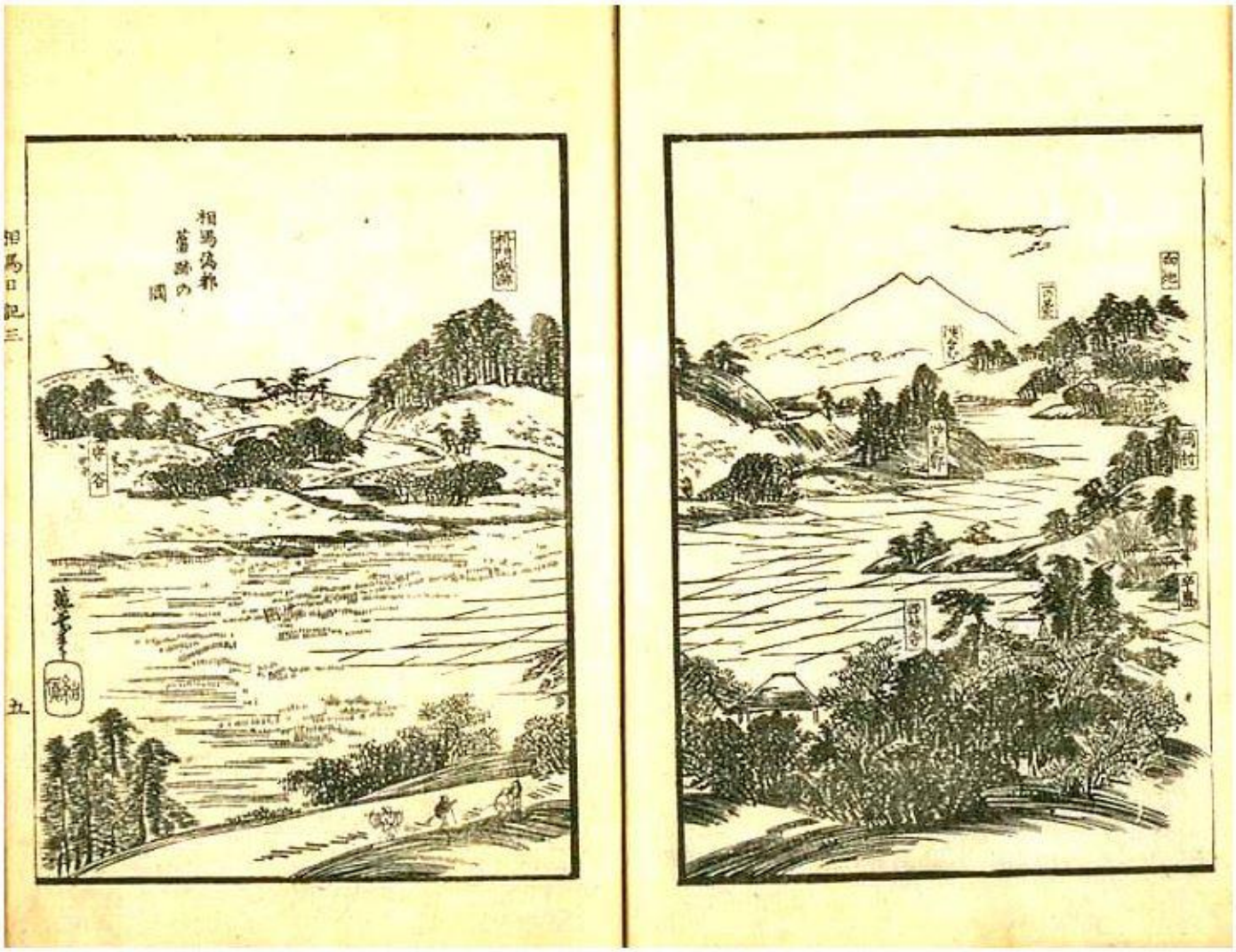
中峠城址公園の城址図

Ⅰ、本廓

Ⅱ、二の廓

Ⅲ、三の廓

◎の断崖の下に「波除不動堂」があります。公園の古利根沼側は古木で見通しがよくありませんが、◎印のところだけ展望が開けて、小堀と沼の筑波山が望めます。



相馬日記の挿絵、「偽りの都」とは守谷です。西林寺や岡村と郷州海道が描かれています。

中峠亀田森神社の祭神

うかのみたまのかみ、立膝の女神
滋賀県守山市小津神社所蔵、重文

小堀の渡し場

http://88souma.net/

「奉納」と「奉拝(ほうはい)」天保 11 年(1840)10 月、四国霊場遍路の納経帳と第二十七番の御朱印。

納経帳＝朱印帳

第 27 番の御朱印

奉納：
「奉納大乗経典(ほうのうだいじょうきょうてん)」御経(般若心経等)の書写を納経した証として頂けるものです。従って、御朱印は仏教が発生基となります。観音霊場巡り等によって江戸時代以降に一般化しました。

奉拝：**参拝**も同じ。
　昭和になって「奉納」の代わりに使われ始めました。写経を必要としない朱印です。購入できる参詣記念の証です。

◆　寺社混合記帳(神社参詣時のご朱印とお寺のご朱印が同じ納経帳に混合記載されたもの)の朱印帳には御朱印を拒否するお寺や、浄土宗派の一部寺院では、朱印を扱わないお寺があります。
また礼儀として御朱印は勤行後に頂いて下さい。御朱印の意義と歴史は日本の伝統の一つです。

古利根岸の波除不動(波切不動)

享保３年(1718)安置、中峠城址の崖崩落がなくなったという。
以来「波よけ不動」という様になったそうです。

高野山南院の波切不動明王は、空海が赤梅檀(しゃくせんだん)の霊木で自作されたと伝えられます。
唐からの帰路、大時化(しけ)で荒れ狂う波の中で祈願したところ、全身から光を放って荒波を鎮めたという。

「梶池」と海老とステーキの店

日本電気我孫子事業所の角にある、レストランかじ池亭のかじ池は、昔から残る自然の沼、夏は湖面の半分が水連に覆われる。海老フライランチは大きな海老でお勧めです。昭和 40 年ころ国道 6 号沿いにあった「母ちゃん」がルーツです。

◆　お遍路コースと霊場所在場所地図

（今回のコース：赤線、状況により一部コースを変更する場合があります）

湖北駅～第 60 番～龍泉寺第 76 番～第 28 番～中峠亀田谷公園(休憩)～法岩院第 51 番～中峠城址公園～

足尾山神社～小堀の渡し場～常円寺跡第 9 番～白泉寺第 22 番～西音寺第 74 番～JR 常磐線天王台駅

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

湖北周辺の難読地名

集合場所：JR 成田線湖北駅北口(成田街道側)

難読地名の紹介ページ

中峠	なかびょう	4ページ	下段
小堀	おおほり	8ページ	上段
都部	いちぶ	9ページ	中段
岡発戸	おかほっと	10ページ	上段
下ヶ戸	さげと	10ページ	中断
日秀	ひびり	11ページ	中段

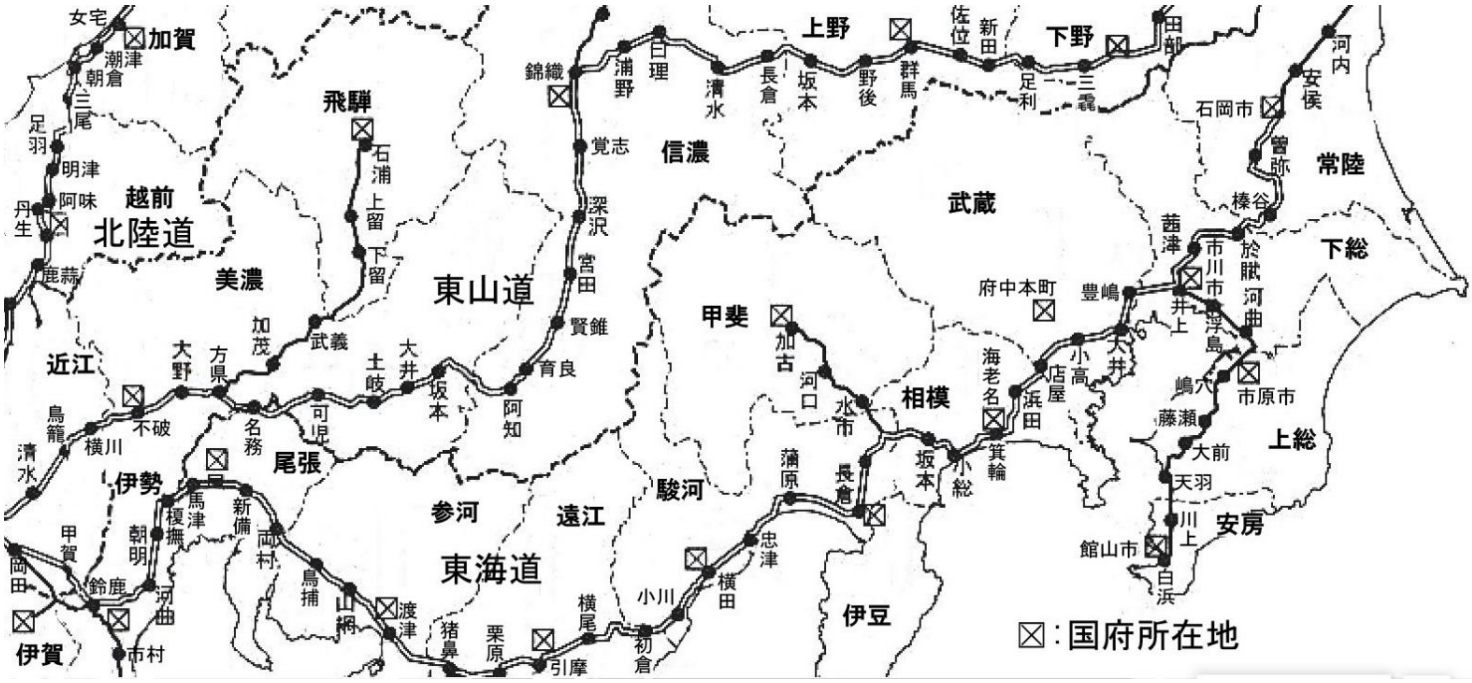
於賦駅(おぶえき)**と中路**(ちゅうろ)**東海道**

この辺りには五畿七道の中路東海道がありました。

通常、旧東海道というと、江戸から京都間を指しますが、古代の東海道は奈良時代から存在しました。

千葉県内の松戸市辺りの井上(いがみ)、市川市の下総国府、柏市藤心辺りの茜津(あかねつ)、我孫子市湖北辺りの於賦(おぶ)、現成田街道の我孫子市布佐手前で利根川を渡り、利根町の蛟蜊(こうもう)神社、龍ケ崎市半田の榛谷(はるたに)に至り阿見、土浦、常陸国府であった石岡市府中へ至る平安時代以降の道幅6m程の国道で、後年、相馬道とも云われていました。

中路東海道は、奈良が起点で市川～柏～布施～守谷～土浦でしが、延期式の出現により現在は、布施、守谷説が訂正され、宝亀二年(771)、下総国府の市川、柏(茜津)～湖北(於賦)～龍ケ崎～土浦に変更されています。奈良時代後期からの話です。



日本における「道」の成立については大化改新以前より存在したとする見方もあり、五畿七道の原型は天武天皇(675頃)の時代に成立と言われています。

当初は全国を、都(難波宮、平城宮、平安宮)周辺を五畿(畿内五国)、それ以外の地域をそれぞれ七道に区分していました。後に五畿は一部を含めて、山城(京都南部)、大和(奈良)、河内、摂津、和泉(大阪)、となります。

都が奈良時代の常陸と下総の古代東海道変遷図
点線は初期の街道、実線は京都遷都後

七道は、大路(たいろ)の山陽道、中路の東海道、東山道、小路(しょうろ)の北陸道、山陰道、南海道(四国)、西海道(九州)、を云いました。明治八年に北海道が追加されて「八道」となっています。

なお、現在は「〇〇街道」と記しますが、近年までは「海道」が使われていました。海上が本来の使われ方でした、しかし、山間の海道が多くなり街道が使われる様になったようです。

延喜式という律令の補助法令、延喜5年(905)編纂開始、延長5年(927)完成、全五十巻、が解読され、「於賦(おふ)」駅という津が存在していた記載が見つかりました。津とは港、舟着場ですが、馬や旅人の休息場でもありました。津はおおよそ20 km毎に設けられ、その規模は徐々に拡大し集落を成すようになったと考えられます。

「於賦」の具体的な場所は記載されていないのですが、環境や古墳等の出土品などで推定された位置は、香取海、前後の津からの距離により湖北か新木辺りとされています。

また、「和名類聚抄」承平年間(931～938)に編纂され相馬郡の「意部郷」という郷名が同じであること

さらに、正倉院文書に「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」とあり、倉麻郡とは相馬郡、意布郷は意部郷と同じと解釈されています。

日秀の西大作遺跡の出土品の土師器(はじき)の墨書きに「意布郷久須部千依女　久須波良部千依女」と記されています。

久須波良部(くすはらべ)とは人名で藤原部(ふじわらべ)であり、後の藤原氏に遠慮して改姓させられたと考えられています。

これらの出土器年代が9世紀である結論により、我孫子市湖北新木地区を中心に、意布郷の存在がほぼ確実になりました。

平安以降の古代東海道のルート

奈良時代の発着地点は、奈良県宇陀市(うだし)が基点で、平城京時代と同時に奈良市、大和郡山の都へ遷ります。この頃は奈良～鈴鹿山脈加太超(かぶとごえ)、後に鈴鹿峠～木曽三川～名古屋へ至る海道で、箱根迄は旧東海道とほぼ同じ道筋でした。

箱根は北側の御殿場経由で遠回りして伊豆半島へ、海を渡り房総半島館山市の安房国へ渡り内房を北上して上総国市原の国府、荒海駅の成田市へ香取海を渡り、茨城県の山方駅、江戸崎を経て鹿島神宮へ至るが主要道でもあったと思われます。板来駅や香取社の津の字が見えます

平安京に遷都後は京都が基点となります。

箱根越えは遠回りのままですが、伊豆半島は相模川へ至るようになり、鎌倉時代は鎌倉から船で安房国へ渡るようになります。

しかし、その後、房総半島へ渡らなくなります、海上ルートより安全な陸ルートへの変更でした。

相模国の海老名国分寺、都下府中市の武蔵国府を経由で練馬区の豊島～下総国府(市川市)、井上(いかみ)～茜津(あかねづ、柏市藤心)～於賦駅(おぶ、湖北)～榛谷駅(はんがや、龍ケ崎市半田)～曾禰駅(そね、土浦市)～石岡の常陸国府の府中迄でした。

以後、水戸、日立方面へと延伸されました。

掲載地図のルートは点線が奈良時代で実線が平安以降の時代を表記してあります。

土浦市郷土資料館「古代のみち」

打始

第六十番、滝前山照名院(廃寺)不動堂、中峠下集会場、ご本尊、不動明王、移し寺、愛媛県石鎚山横峰寺ご真言、のうまくさんまんだばざらだん

せんだまかろしゃだそわたや

うんたらたかんまん

御詠歌 たてよこに峰や山べに寺たてて

あまねく人をすくうものかな

「湖北村誌」の伝説に拠れば、不動明王腹中の秘仏は寛平年中(889～898)高望王(たかもちおお)が上総介に任じられて赴任の際に守護してきたもので、延暦23年(804)に空海が遣唐使とともに入唐の際、帰路船中にて一刀三礼して刻んだものといわれています。

高望王はその後滝前村に滝前不動を作って安置しましたが寛和二年(986)の暴風雨で堂宇が破壊し現在地に移されました。安永四年(1775)照妙院(空寺)の管理下となりましたが俗称に不動尊として知られています。不動明王の腹中の秘仏は、龍泉寺の波切不動明王の逸話と酷似しているため、また龍泉寺の末寺により、照妙院不動堂の不動明王は龍泉寺の分本尊になるのではと、云われています。

不動明王像は玉眼入りの彩色木造坐像です。

境内には庚申塔、馬頭観音、愛染明王、如意輪観音、天神、修験塔など多数の石造物が整理されていて、天邪鬼(あまのじゃく)を台石にした庚申塔などが

あります。照妙院と記する場合もあります。
当寺の仏像は敷地内の中峠下公民館内に安置されています。

第七十六番、真言宗豊山派南命山龍泉寺、
我孫子市中峠、開基開山不詳。もとは筑波郡信太庄大岩田の新義真言宗派(1146〜)法泉寺の末寺。
ご本尊、波切不動明王。
ご真言、のうまくさんまんだばざらだん
せんだまかろしゃだそわたや
うんたらたかんまん
移し寺、香川県鶏足山金倉寺
御詠歌 誠にも神仏僧をひらくれば
真言加持のふしぎなりけり
「湖北村誌」伝説によると「弘法大師関東巡錫のおり手賀沼の風景を愛され、湖畔の丘、中里村東原(とうばら)の草庵に足を留めて波切不動尊の像を刻んで安置し、鷹法山龍泉寺と称した」と記されていて、我孫子市の寺院では最も古い草創の伝説があるが、空海作の波切不動明王像は高野山南院が原像尊とされております。【補足】空海の関東巡錫は伝説です。
将門の起した「天慶の乱」で伽藍を焼失し再建されましたが、その後も罹災と復旧を繰返したため、天文年間(1532〜1555)権大僧都永楽法印が現在の芝原(しばら)の地に移し南命山としました。
古い記録は失われましたが、後には中相馬七ヶ村(新木・日秀・古戸・中里・中峠・都部・岡発戸)の祈願檀徒と称して中相馬七ヶ村の神社の別当寺として中相馬の名刹と言われていました。
更に青山無量院、柴崎円福寺、高野山最勝院、下ヶ戸西音寺、中峠宝照院、新木長福寺など近郷十四ヶ寺の末寺を有していました。
堂宇は安政の火災の後、仮堂のまま推移しましたが、昭和30年に上野の凌雲院(りょううんいん、国立西洋美術館の地にあり寛永寺の境内でした)の本堂や庫裏(くり)の寄贈を受けて移築され昭和47年には本堂内陣の増築を行いました。
山門の石柱は、谷中の初音山東漸寺観智院のものを大正年間に移築したものです。声明(しょうみょう)で有名な観智院です。
大師堂は大きく石造の大師像が四体あります、明治年代に改築されたのですが最近再修復されました。
本堂の左手前には大きな弘法大師旅姿の石像があり、本堂内には弘法大師こと空海の歴史絵が掲げられています。

第二十八番、中峠(なかびょう)青年館
宝照院(ほうしょういん、廃寺)旧法性院又法照院、真言宗もと龍泉寺の末寺。開宗開基共に不詳。
ご本尊、不動明王。大日如来(未確認)、
ご真言、のうまくさんまんだばざらだん
せんだまかろしゃだそわたや
うんたらたかんまん
移し寺、高知県法界山大日寺
御詠歌 つゆ霜と罪を照らせる大日寺
などか歩みを運ばざらまし
法照院は龍泉寺の末寺として古くからあったと記録されています。明治初年に廃寺となり、昭和41年に青年館が建ちその一部を仏間として不動明王像と元禄十年(1697)命名の大日如来像が保存されています。院名の漢字の使い方が数種あり。元文五年(1740)の中峠村記録は「法性院」ですが、法照院や宝照院も使われています。安永四年(1775)の大師霊場の札所が建立されています。大師堂の屋根には火炎付宝珠が乗っていて相馬霊場では珍しい。
隣の長屋風のお堂は阿弥陀堂で、石神社、天満宮、待道権現の集合社で、大師堂との間には愛染明王の石像があります。

不動明王について
空海が唐より密教を伝えた際に日本に不動明王の図像が持ち込まれたと伝われています。
「不動」の尊名は、八世紀前半、菩提流志(ぼだいるし)が漢訳した「不空羂索神変真言経」に「不動使者」として現れるのが最初です。
「使者」とは、大日如来の使者という意味で、脇待として置かれる事も多い。
不動明王像は、大きく次の三形体に分けられます。
東寺型：東寺講堂の空海作の坐像が典型で、不動明王像では非常に多い形です。
浪切不動型：高野山南院の立像が典型で空海作。剣をかざして波を斬るような像容です。
黄不動型：園城寺の画像が有名で円珍が感得した像といわれ、体型はスリムで成人男性、金色の立像という異例の像です。
高野山の壇上伽藍の不動堂と八大童子を従えた不動明王は、堂を含めて国宝として名高い。

高野山南院の浪切不動明王、御開帳6月28日。

高野山別格本山浪切不動尊別当南院

空海が唐より帰国のとき嵐に遭い、その時、空海は自ら不動明王を刻み祈願して荒波を鎮め無事に帰国できたといいます。

その不動明王像は当初壇上伽藍の山王院に安置されていましたが、平安時代南院住職維範大徳により、高野山南院へ移されました。現在の建物は、弘化2年(1845)の再建で国重要文化財指定です。

壇上伽藍上蓮池の脇に国宝不動堂がある、建久8年(1197)鳥羽天皇皇女の建立。不動明王と八大童子像が祀られていたが金剛峯寺に鎮座しています。

堂内の床板などには血生臭や肉体が引き摺られた傷の痕跡が残っていたと記録があります。

亀田森稲荷大明神　旧村社

御祭神　宇迦之御魂神(古事記)、倉稲御魂神、豊穣、家内安全、諸願成就等崇敬し護持している。

名前の宇迦は穀物という意味なので「穀物の神」です。また宇迦は「ウケ(食物)」の古形で、特に稲霊を表し、「御」は、神秘、神聖、「魂」は霊で、名義は「稲に宿る神秘な霊」と考えられています。

記述はないが、古くから女神とされています。

京都伏見稲荷大社の主祭神であり、お稲荷さんとして広く信仰されています。日本書紀には倉稲御魂神とありが、本文には登場していない神です。

亀田谷稲荷は古墳上に建築とされたと云うが誤認、古墳は亀田谷公園北東部の住宅地にあったそうで古墳は湮滅して現在は住宅街となっている。

亀田谷公園は災害時の避難場所となっており、ベンチは竈に変身できるとか。(トイレ休憩)

第五十一番、祝融山法岩院(ほうがんいん)、曹洞宗

俗称、田寺(たでら)、関宿の長昌寺末寺でした。

ご本尊、釈迦如来。　移し寺、愛媛県熊野山石手寺、

ご真言、のうまく　さんまんだ　ぼだなん　ばく

御詠歌、西方をよそとは見まじ安養の

寺にまいりて　うくる十楽

開山した正覚禅師雪田真良和尚に、開基した中峠城主の河村出羽守勝融が頼み、城に相対する寺山台の地に、天文11年(1542)創建したという縁起です。

後北条氏の麾下(きか)であった河村氏は天正18年(1590)の小田原城落城と共に領主の地位を失い、中峠城も廃城となりました。城主河村出羽守勝融の家臣で城代であった林伊賀守順道(よりみち)は、城主の妻子の先途を見届け従士三十二人と共に自刀し悲運をとげました、村人が建立した**順道塚**(じゅんどうつか)が当寺から東方 1300 m程先の竹藪中にあります。

罹災し再建された堂宇は十六世天然自暁和尚により半鐘の造立など整備されましたが、再度罹災し二十世越山和尚の時に地蔵ヶ谷津の現在地に移されました。本尊は落慶時以降の弥勒菩薩が釈迦牟尼仏へ。

以前は寺の三方、南の寺前、西の赤坂と市領、北の根古屋と外谷津の水神前は一面の水田で、東は寺畑といい畑が一面に続いていたことから「田寺」の愛称で呼ばれました。本堂は昭和55年に落慶。

境内には、道了尊、韋駄天像、達磨大師像、弁財天像などがあります、大師堂は明治13年の再建で向拝天井に彩色の七福神図があり、扉脇の羽目板には龍の彫刻や小壁に波涛と獅子の彫刻があります。

大師堂南側に道了尊像があり、道了尊が守護神の曹洞宗**大雄山最乗寺**(伊豆箱根鉄道大雄山線)の輪番寺として深い関係であったことが伺われます。

檀家の財前重信氏の紹介による郷土史研究家長沼友兄氏の論集では河村氏が後北条氏草創の時期からの家臣で相模国足柄上郡川村郷(御殿場線山北駅)を在地とし、この地に派遣されて中峠城に入り、天文十年(1541)に北条氏の滅亡と共に滅んだもので、川村郷が曹洞宗の古刹大雄山最乗寺のある現在の南足柄市に隣接していた為、法岩院の本寺である長昌寺が最乗寺の門末に当ることから、この地に法岩院を開基したものと著されています。

【地名】中峠(なかびょう)

昭和の時代までは、近隣の人々を含めて「芝原(しばら)」と呼ばれていて中峠とはいわなかった様です。

中峠とは、峠の中間地点を言います、地形の境という意味を含むそうです。峠を「ひょう」と読むのは、「標」の音で境を意味するそうです。

しかし中峠を「なかびょう」と通常は読みません。

芝原城を中峠城と改めたのは、城主河村出羽守で、読み方で峠を「びょう」と自分勝手に創った様です。

文禄元年徳川氏の領となって村名を中峠村と公称おかげで、千葉県内には、稲荷峠(とうかんびょう)、とか、大峠(おおびょう)など千葉県だけに存在する、呼び名が残っています。

「びょう」と読むところは千葉県だけです。
稲荷峠(とうかんびょう)、我孫子市並木7丁目
印旛郡永治村大字浦幡新田字榎峠(えのきびょう)
上総山武郡源村大字滝沢字峠道(びょうみち)

古利根沼(ふるとねぬま)

明治時代以前の利根川は、我孫子の青山から湖北の根古屋にかけて、南側へ大きく迂回して流れていたため、しばしば堤防が切れて大きな被害をもたらしていました。そこで、明治末期から大正時代にかけての利根川改修によって流路変更が行われ、明治44年、本流の湾曲部が取り残された結果、古利根沼三日月湖ができました。

現在、千葉県と茨城県の県境となっています。

このため古利根沼と利根川に挟まれた細長い村落は、茨城県取手町小堀(おおほり)と飛地となりました。

小堀は取手町井野という住所でしたが、我孫子への編入を住人は拒否したそうです。このことによる弊害として、この地域に住んでいる小中学生は舟を使って利根川を渡り学校へ通わなければならず、小堀の渡しは大変重要で永い年月活躍しました。現在は、取手駅周辺まで取手市コミュニティバスで通学しています。勿論無料です。

中峠城跡公園

中峠城址、あるいは芝原(しばら)城址跡を公園として我孫子市が管理保存しています。

永正年間(1504～1520)に在地の土豪芝原氏が築城したものでしたが、天文十年(1541)に河村氏が外谷津台の城地を修復して、芝原城を改めて中峠城と命名したと言われています。記財前氏により。

中峠城址公園からは、古利根越しに取手市小堀の村落と遠く筑波山の景色が広がります。

眼下の古利根沿岸には、享保三年(1718)に波除不動尊が安置されています。古利根は三日月湖となりましたが、明治44年迄は利根川急流部であり、中峠は出水による崖の崩落に悩まされていました。ここに「波除不動尊」を祀った理由が伺われます、

現在は古利根湖が眼下に横たわるが、戦国の頃は常陸川という流れが岩井辺りの湖沼から菅生沼を経て、藺沼(いぬま)という大きな湖沼に水を湛えてから再び小さな河川となり手賀海へ流出、河川の規模は小川程度なので問題視するような川ではなかった。

芝原(しばら)と呼ばれていた、この当時の城山に河村出羽守は画期的な変革をとげたという。

本城の大手門馬場先跡と伝えられる所は、外谷津と天地窪谷とによって左右より狭められて袋をくくったような茶巾(きんちゃく)袋地形で、所々に丘陵が起状し、進退馳引には最も便利の赴きがあり、その狭い前方に番守という名を残している。

永正年間(1504～20)に土豪芝原氏がこれを修築し、天文十年(1541)に河村出羽守が入城して、柴崎城主荒木三河守とともに相馬氏に属し、その子 山城守(やましろかみ、名誉職)は永禄四年(1561)対岸の小文間(おもんま)城主一色氏を攻め雁金山(かりがねやま、現取手市城根)の一戦で勇名を馳せたが、天正元年小田原北条氏との根戸村合戦で敵の射矢を負って討死しました。

中峠の外輪式蒸気船(外輪船)

布佐や中峠の蒸気船には、中峠(芝原)河岸の開運丸、布佐の大吉丸と有功丸が明治10年頃に運行されていました。

明治18年(1885)の千葉県汽船表によると、7隻の外輪船が運行されていました、信義丸と第一、第二銚港丸は木下、開運丸は中峠、大吉丸と有功丸は布佐、三倉丸は今上(現野田市)の蒸気船でした。

利根川を運航した外輪船は、船体左右の外輪で推進する船で川底の浅い利根運河などに向いていた。

明治29年の鉄道開通まで、多くの蒸気船が坂東太郎を往来していました。

錦絵に描かれた、通運丸は明治15年(1882)に内国通運株式会社と銚子汽船会社の合併により両国通運株式会社で、現在の日本通運となりました。

銚子から利根川を上り関宿から江戸川を下り新川を経て両国に至る航路で運行されていました。

根古屋足尾山神社

根古屋足尾山神社は、茨城県桜川市石岡市境にある足尾山神社を勧請して創建、今井四郎兵衛家の氏神として祀られたといいます。祭神は面足(おもたり)命。創建は文治年間(1185～1189)と伝えられている個人が建立した神社です。

総社のある足尾山は筑波連山の加波山近くの山に、足尾神社奥殿が鎮座している。

『常陸国風土記』に、平安時代に醍醐天皇がこの山の神社に祈願し足の病が治ったことから、「日本最初足尾神社」の勅額を下賜したため「足尾山」に改称

し、加波山と共に天狗の山として知られている。
足尾山へは、筑西市真壁から山越道に入り、きのこ山方面にオフロードが続いていて、案内板も設置されています。現在は、パラグライダーのメッカと化している。子の神信仰との共通点が伺えます。

古戸(ふるど)片町と小文間の幻の都

成田街道の別名に佐竹海道がありました。
佐竹海道は我孫子市街の成田街道追分から中峠までは国道356号ですが、古戸片町から方向を変えて北東の茨城県利根町へと向かいます。
鎌倉時代の利根川は常陸川という小さな川で香取海の河口近くであったと思われます。渇水期は舟など必要な地形ではなかったのではないでしょうか。
中峠の東隣が古戸、更に東が江蔵地となります。
古戸東部の利根川河川敷には、渡船場前という字地名が残っていたそうです。此の渡しが「神出の渡し」で対岸の東谷寺下、宗次郎坂へと続きます。
江戸時代からの「三角の渡し」とは別の渡しです。
神出の渡しはお遍路の渡しとも言っていました。
船はあれども船頭が見えず、「船頭さん　舟を出しておくれ」と言うと船頭が出てきたそうです。
また、お遍路さんは、相馬霊場大師巡り時の際、同行者が少人数の場合は、戸田井の渡しよりも、融通が利き何時でも直ぐに渡れたため、さらに規制がないので便利だったのでしょう。
太平洋戦争中は徴兵制度が施行され、赤紙という召集令状が各家の二十歳以上の青年宛へ届きます。健康な青年は全員が対象で強制でした。
相馬霊場第19番は、徴兵逃れのために願掛け参りに来る若者が、この神出しの渡しをよく利用したという話を小文間の元船頭のご子息から聞きました。
古代東海道の道筋が現在のところ明確ではないのですが、利根町の蛟蜩(こうもう)神社を経て龍ケ崎へ至り、常陸太田へ続いていた、とすると古東海道ルートと近くて似ています。

取手町郷土資料集第二集、昭和45年版に
「五条街の謎」という記載があります。

五条街の謎（原本のまま掲載）

取手市小文間には古来の史実を調べる上で文書による資料は少ないが人類の生存、生活についてほ福永寺貝塚に見られるような幾つかの遺跡と先祖より代々伝わる伝説によってある程度のものはうかがい知ることができる。しかし今日に至るもその遺跡が解明されず依然として謎に包まれているものもある。
ここに小文間利根耕地つまり現利根川岸の草地に連なり幅五門にわたる道路と、これに附随する幾つかの邸宅の跡が残されているが、古来これを人呼んで五条街また五条道と称えて今日に及んでいる。
屋敷跡については今時戦中戦後における原野開墾の際見られたが、赤く土を焼いた釜戸の跡と、土塀が屋敷に巡らされた跡があり、そこは幾分土が高く盛られている。
屋敷跡は皆この五門道路に沿って存在する。
道路の起点はかつて神出しの渡しと言われた渡船場の近くであり、西方に延びて途中相の谷(相野谷川)水路あたりでのめるように利根川に没している。
邸の面積を推測するに一戸いずれも五百坪前後と思われる。道路についても現利根川敷地に入っているものも含め、現在のものより広大でありかつ直通している現状から推して、往古における都の道路に似せた碁盤目の道路が存在したものと推定されるのである。
この一帯は北方に丘陵地を形どって夏は涼しく冬暖かであり、丘陵地の一つを閑居山と呼ばれるのは、何かこの地に都の渡人か、または都に関係のある豪族が住まったことを物語るような響きを感ずる。
且つ、この近くに安養寺なる古寺も存し、よく注視すれば史上幾多の謎に包まれている。
日本史によってこの事実を観察すると、五門道路のような大道は奈良朝時代によく現われ戦国時代以降にはあまり例を見ない、それに加えて屋敷跡における土塀も戦国以前のものにその例を多く見る。
これを郷土関係の史実に照して見れば遠く平安時代中妻に福永寺を建て、谷津地に細々と田を耕し、すでに村落を形造っていた頃とて、豪族の屋敷が南谷津にあっても不思議はない。
この当時わが村も種々なる権力者によって統治され幾多の変遷もあったことに相違ないが、古くは相馬御厨の神領として相馬郡千町歩の中に含まれていたことは明らかであるが、江戸時代の初期利根川口つけ替えになる以前は、近郷の低地は大小の池沼が横たわり無数の河川が乱流していたもののようであり、住いも丘陵地帯に近い所が選ばれたことは水辺との関係で便利である点からもうなずける。
よって小文間なども古くは台地よりもむしろ台地

に面した根柄から先に住みついたように推察される。
利根川のなかった当時の小文間南面はおそらく広い野原が千葉県側の台地まで続いたものであろう。
五条道が利根川に入って消えていることは利根川改修前からこの低地一帯に存在していることを物語るものである。
これを戦国時代にあてはめて考えるに小文間城主一色氏摩下の諸豪は主に北方の棍柄に居住した形跡がある。
当時の時代においては五門道路の建設も、屋敷の土塀様式と少し時代が合わず、全然考えられないことではないが、一色の部将の屋敷跡とは思われない。
それより以前のもののような気がする。
一色氏の城下町としても道路の幅が大きすぎるような気がするのである。
また思うにかつて小文間南部落はさきに利根川原に面した低地から開け、戦後の利根川洪水前は多くの人家も現在の利敬川原にあったことに鑑み住み良い点で古くから人の集まりはあったに違いないが、この五条街と称する集落は依然として深い謎に包まれ、新時代の解明を静かに待つもののように悠然と横たわっている。
取手町郷土史資料集(第二集)第一章近世、十一項小文間の交通と住居、二、五条街の謎
取手町教育委員会　昭和45年9月21日発行

第九番、龍頭山常円寺(空寺)、
茨城県取手市小堀(おおほり)、
ご本尊、不動明王は慈覚大師の造像といわれます。
ご真言、のうまくさんまんだばざらだん
せんだまかろしゃだそわたや
うんたらたかんまん
移し寺、徳島県正覚院法輪寺、
御詠歌、大乗のひほうも科(とが)もひるがえし
転法輪の　縁とこそきけ
本尊の不動明王は慈覚大師の作で、千葉氏千葉介千葉常胤(元永元年(1118)～建仁元年(1201))以来の守り本尊です。
慈覚大師、円仁(えんにん)、延暦13年(794)～貞観6年1月14日(864/2/24)は、第三代天台座主です。
出身は下野国壬生の豪族、比叡山延暦寺に上り最澄に師事、遣唐使として留学しています。
目黒不動の瀧泉寺や、山形市の山寺立石寺、松島の瑞巌寺を開基したと言われています。
常円寺の本尊不動明王像は、小田原城の落城と共に佐倉城も落城し当時病床にあった千葉重胤は「この像と一宇を建てて国家安穏の守護と成せ」と家臣椎名右京亮(うきょうのすけ)に遺言し落命しました。
右京亮は、名を常円と改め千葉家菩提のため廻国巡礼していましたが、岡村に居を構えていたある年、悪疫が流行しました、常円は尊像を出して霊験を説いたところ、この像を拝んだ者は、ことごとく病を除くことが出来たと言われています。
当時の小堀は新開地で鎮守が無かったため村人は尊像を迎えることを図りました、常円は大いに喜び明暦元年(1655)常円寺を開基しました。火災、水難、疫病の守護として参詣者が多く訪れたそうです。
明治になって銚子から利根運河(柏～野田)を経由して江戸川を下り東京へ、また水海道から鬼怒川を経て東京へ定期船が運行していました。
鉄道輸送以前の時代までの取手はこの小堀(おおほり)が河岸として町の中心的存在でした。
古利根湖は釣りの名所となり、渡し船はなくなりましたが、利根川に残る「小堀の渡し舟」は今も連絡しています。渡し舟の中に、ハクレン(中国産魚)が飛込んだとか。**現在、ハクレンは栗橋へ引っ越しました。**
今は渡しの他に、取手駅東口と小堀間連絡バスが主交通機関となっています。

小堀の舟上山車祭り、常円寺境内の水神宮大祭。
取手市小堀は、利根川を挟んで飛地となっているが、常磐線鉄橋が架かり、明治44年の利根川河川直線化までは取手市井野村の一部でした。
この小堀には、江戸時代から豪勢な祭りがあり、近郷に鳴り響いていたことが「利根川図志」に出ています。現在は行われていません。
「夜に入りて神輿を船にて利根川に浮かべ流れに隨って静かに下る。船には幕を張り鉾(ほこ)を立て、夥(おびただ)しく桃燈(ちょうちん)を掛け、笛、太鼓、噺子物の声、高欄(欄干のある舞台)の内に起こる、此の時後舟より煙火をあぐ、其の数甚(はなは)だ多し、之を看(見)る人両岸に雲集し、持連ねたる燈は月の如く水中に倒映して金波銀波を生じ、傍ら涼風に暑さを消し、酒食の興(きょう)を添えて実に此れ地の壮観なり」とある。舟上の「水上山車祭り」の様子が伺えます。　海上渡御(かいじょうとぎょ)というが、神輿を使う祭りが多く、山車で行う祭りは少ない。

【地名】小堀(おおほり)

「小さな堀が沢山ある所」から「多堀」となって、多くの小堀で「おおほり」と言う様になったとか、と聞いていますが、真相は不明です。

また、押堀や落堀をオッポリと言っていました。

押堀とは、川が増水した時に、自然の流れにより出来る大きな水溜の意味です。一度作られると同じ場所に再び出来るそうで、河川の砂地に作られやすく蟻地獄のように一度落ちると這い上がることが出来なくなるという危険性を伴うようです。

村の分断以前は井野村の一部で古文書等には小堀ではなく「井野」と記述されていることが多い。

利根川の直線化で分断された理由は、明治29年開通の常磐線の利根川大河川の鐵道架橋への安全確保も要因の一つと言われています。

近年、河川の直線化は、自然破壊による動植物への影響で疑問と異論が出ています。

落堀(おとしほり)

利根川下流には、落堀が多いようです。

「落堀」は、排水路を意味します。埼玉県には「大落(おおおとし)古利根川」という利根川の旧流路や、「○○落」という名前の排水路が沢山あります。

落堀や押堀と書かれている場合もありますが、かえって混乱するので押堀あるいは「おっ堀」に統一すべきだといわれています。

利根川の河岸と渡し場

利根川はもと江戸川を流れていましたが、利根川の東遷により、水害防備と新田開発の目的から、現在の銚子に流されるようになりました。

江戸の出水が少なくなったかわりに、関宿から木下間は中利根川と言い、カスリーン台風等の数年毎に大きな洪水にみまわれるようになりました。

その上、軍事上の意図から橋というものがほとんどかけられなかったので、水郷の米や九十九里の干鰯(ほしか)の輸送には、主に舟が利用されるようになり、そうした舟の寄港地が河岸と称されて、利根川沿いに幾つも乱立したのでした。

中利根川域では、木下(きおろし)、六軒堀、布佐、布川、取手、戸頭等が河岸として盛へ、その中でも布川、木下河岸は幕府公認でした。

この木下河岸の名は印旛沼北部一帯に産出する材木薪炭類を積出したことから名付けられたといわれ、利根川中流における水陸の要衝に当たっていたから、寛文元年(1661)頃から河岸問屋が設けられており、江戸時代を通じて非常ににぎわい、所属の船三千艘がこの河岸に出入し、そのうち約二千艘が銚子からの魚荷だといいます。この河岸に出入する船頭の数は千四百人に及んだと云います。

木下河岸には、延宝六年(1678)以来、香取宮、鹿島宮、神栖市の息栖(いきす)社の東国三社参詣の客船が営業されるようになり、木下と鹿島間の川道15里を、八人乗の屋形茶船が八百文で運航した様です。

武士や大店、文人墨客が、夜出て夜戻る木下河岸の茶船は金持ちの旅、一般は銚子道をひたすら巡礼したようです。生魚の匂いに耐えられず、布佐の都から鹿嶋へ夜逃げした松尾芭蕉の話もあります。

江戸時代の初期から中期にかけて、水戸街道宿駅として繁栄した我孫子宿も、後半になると助郷制度の負担が重荷になり、いたる所でその弊害を呈し始め、我孫子宿の停滞が目立つ一方、利根川河岸である布佐が賑やかさを増していきました。

第二十二番、岡発戸(おかほっと)八幡神社、

岡発戸の曹洞宗万岳山白泉寺(空寺) 正泉寺末寺。

ご本尊、釈迦如来。移し寺、徳島県白水山平等寺

ご真言、のうまく さんまんだ ぼだなん ばく

御詠歌、平等にへだてのなきと聞く時は

あら頼もしき 仏とぞみる

創立は慶長15年(1610)、開山は竹厳宗嫩(ちくげんそうどん)、隣接している岡発戸八幡神社の別当寺でした。現在、白泉寺は昭和初年より無住となり空寺で正泉寺住職が兼務しています。

境内には待道(まちどう)大権現社があり、玉垣に安永四年(1775)の刻銘がありますが開基不明です。

白泉寺はこの地方の中心として既婚女性の安産と子供の無病息災を祈る「待道講」の普及に尽力した寺でした。待道講は、柏市逆井や宿連寺、花野井、松戸と広まり「マツドッ講」と呼ばれた女人講でした。都部の正泉寺の「女人成仏血盆経」とともに、布教は行われておらず、講も現存しません。

冬のある日、出産近い妊婦は参道で出稼ぎしている夫の帰郷を待つ約束をしました。しかし、夫は手賀沼淵へ向かい妊婦の妻を探します。来ない夫を待つ妻は産気付き道端にムシロを敷き赤子を生んで亡くなってしまいました。待つ道＝待道の口伝です。

昭和30年に建物を改修し岡発戸公民館を設置し

て、その一間を仏間として阿弥陀如来像、十一面観音像、薬師如来像を納めていました。

大師堂には石造大師像二体と大正13年奉納の像高23cmの瓦造観覚光音禅師像があります。

意志強固な風貌で大きな福耳を持つと伝えられた光音禅師の姿を偲ぶ事が出来ます。

八幡神社の祭神は誉田別命(ほんだわけのみこと)、素戔嗚命(すさのおのみこと)、武甕槌命(たけみかづちのみこと)。正徳四年(1714)の創立と伝えられています。

神像は高村光雲に師事した大谷善兵衛昭和13年の作で、先の三神は夫々八幡大神、八坂大神、春日大神の主神であり合祀されたものと思われます。

白泉寺脇の坂を北へ向って下りて行く途中に、今でも清水が湧き出ている井戸があります、鎌倉道に登場する、将門の井戸を含む湖北の七つ井戸の一つです、それらの水は村人の生活飲料水として、また農業用水として使われ、正月元旦には神様の水として神棚に供えられました。

岡発戸では、この**八幡井戸**の他もう一つ井戸がありますが、それ以外に井戸は掘ってはいけないと言われて来たため、長い間水汲みや水運びに子供達が難渋したそうです。

我孫子郷土史湖北会、我孫子市教育委員会。

八幡の井戸は**「中相馬七ケ村(湖北)の七つ井戸」**の一つです、**大日井戸**と呼ばれていました。七つ井戸はこの他に、下新木葺不合神社の**「弁天の井戸」**、上新木の**「香取の井戸」**、日秀の**「将門の井戸」**、中峠の**「桜井戸」**、湖北台八幡神社南の**「元日**(がんち)**の井戸」**、湖北台東小学校の**「井戸坂の井戸」**が鎌倉道沿いに点在していました。「元日の井戸」と「井戸坂の井戸」は道路下に失せましたが、八幡の井戸は、ポンプ小屋が造られ利用されています。

【地名】　都部(いちぶ)

宿町村は人口数で使い分けされますが「都」は最たる所、「一」は最たる数値であることから、都は一と共通する意味がありました、一番部落が都部落に変化した説、　　角川地名辞典より。

正泉寺の伝説である、経典を唱えると手賀沼の水面の一部、都部から水が噴き出したところの由来話もあります。

久安2年(1146)4月、千葉常胤(つねたね)は、下総国衙への官物未進(みしん)分、未納品を納め相馬郡司職を回復し、父である常重の相馬郷返却を実現します。

常胤は8月に支配地域を伊勢神宮に寄進し、相馬御厨として相馬家へと受け継がれられました。

弘長3年(1263)創建の正泉寺には天正16年(1588)の手賀城主原胤親(はらたねちか)の位牌が残されており、利根町である布川の豊島家支配下であった様子が伺えるとのことです。

慶長9年(1604)旗本井関氏が「市分村」を与えられたという家系図伝、また寛永2年(1625)旗本伊吹重正へ知行宛行(あてがい)状に「市分村百石」など「市分」「市部」などの村名が使われていました。

明治6年、下総国から千葉県に編入しています。

湖北台円筒分水　(立寄無)

南西にある滝下揚水機場からポンプで送られた流入水は内側の円筒部に、柄杓の柄のような石の水路にて中央に注がれます。水音が激しいので住宅に接する面は防音壁で囲ってあります。

内側の円筒から吹き上がり外側の円筒部に分水され、その水の量は均等に分配されている様子が一目できます。分配された水は円筒外側の流出口より、3方向へ分水しています。

東方向の新木、古戸地区から県営我孫子用水幹線の他、北方向は中峠地区へ、南は都部新田地区(水田面積300ha)へ送られます。分水路は暗渠なので見えません。運転時間は4月半ば～8月下旬までの期間、通常7時～18時。

滝下揚水機場：　我孫子市岡発戸字滝ノ下、あやめ道端より湖北寄り200m、手賀沼ふれあいライン湖畔側、八幡社隣、

昭和41年竣工の国営施設で湖北台円筒分水も同時期に完成と思われます。

此処の先の遊歩道の手賀沼湖畔に、手賀沼水質自動監視室があり、手賀沼に取水口があります。

我孫子市谷津ミュージアム。(立寄無)

広大な岡発戸には谷津が保存されていて、『谷津ミュージアム』といいます。我孫子市民の共同事業として推進されているそうで、自然と人の営みが育んだ多様な生態系を復活、谷津田と休耕田を湿地化してホタルやアカガエルなど多くの生物が生息出来るビオトープとして保護し、それを守っています。

七月中旬「ホタル狩り」が行われていたのですが、コロナ流行以降、どうしたのでしょう。

【地名】岡発戸(おかほっと)

地形が「ほと、陰」女性の陰部に似ている、「ほと」は江戸時代には男子の性器も含めて使われた隠語で山間の窪地、凹所の意味。江戸時代の男と女は、気持ちがおおらかだったと良く聞きます。

また火種の元で鍛冶屋をさした。

地元では「おかぼっと」とも言うそうで、「岡程戸」「岡陰」「岡発土」と記した時代があったという。

谷津ミュージアムを上空から見ると地形が「股の間」に見えるが、江戸時代にどうやって見たのか ？

埼玉県羽生市に「発戸」字地名があり「ほっと」と呼ばれていました。

第七十四番、下ヶ戸永光山西音寺、真言宗豊山派。

御本尊、薬師如来。移し寺、香川県医王山甲山寺、ご真言、おんころころせんだり まとうぎ そわか御詠歌、十二神味方にもてるいくさ(戦)には

おのれ(己)と心 かぶと山かな

草創については不詳、寛永12年(1635)の碑とか、正保2年(1645)の宝筐印塔などがある。

本堂は鉄筋コンクリート造り、入母屋、瓦葺、三方縁、向拝付で昭和51年の再建。大師堂、光音禅師の堂、不明な堂と並んでいる。昭和14年の霊場保存会の再建記念碑、善光寺阿弥陀如来の供養塔がある。

また、本堂の再建記念碑文により、「**下ヶ戸**(さげと)地区十六町の水田の一部六反六畝三歩の鍛冶池を灌漑(かんがい)池としていたが、昭和48年日本電気(NEC)の工場敷地に内定し三六五〇万円余で譲渡、これを再建費用に当てた。

現在、「日の出」地名のNECの工場がある所の一角に「梶池」と言う灌水時の溜まり池が残っている。かじ池亭レストラン内の睡蓮の池が梶池です。

右手奥に八幡神社がある、明和6年(1769)の創建。昔は取手大鹿城址を対岸に望む位置に建立されていたが、明治政府の強引な神社整理策(七万社を廃棄)は明治39年(1906)の**神社合祀令**によって現在の天神社境内に移されました。祭神は誉田別命。

八幡社本来の場所は、当所より300ｍ程東の「下ヶ戸貝塚」に碑が残っています。

俳人小林一茶は文化11年11月26日に西音寺を訪れています、七番日記より。

「**下戸村**(げこむら)**や しんかんとして 梅の花**

(しんかん＝ひっそりと静かな様子) **一茶**」

打止

【地名】下ヶ戸については明確な説がない。

一茶の句にある「下戸村」であれば次の通りです

「下戸(げこ)」とは、酒が飲めない人、「下戸」の語源の由来で、律令制では資産や家族の人数で「大戸、上戸、中戸、下戸」の四つの課税単位が決められ、また婚礼時の酒の量が上戸は八瓶、下戸は二瓶とされていたことから、酒を飲めない人を「下戸」と呼び多く飲む人を「上戸(じょうご)」又は蟒蛇(うわばみ)と呼ぶのは皆さまもご存知のとおりです。

下戸は四等戸の最下級で正丁(税を負担する22才から59才の公民男子)が2人か3人の家で、「下戸村」はこのような家の集まる集落であったようです。

梶池は押堀(おっぽり)**の残り**

NEC日本電気の敷地の角地に、かじ池亭とともに佇む梶池は、利根川の氾濫で池として残った押堀の一つで、昭和30年頃には梶池を中央に北に4池、東に4池が曲線上に並んでいました。

NECの工場整地の際、埋め立てられ梶池のみ残されました。池端には水神宮が祀られています。

同じ頃の昭和40年頃、国道6号青山交差点の角に、「レストラン母ちゃん」がありました。海老とステーキが名物で、当時としては高級ドライブインとして人気で大勢のドライバーが立寄っていました。

日本電気我孫子事業所が稼働した頃、レストラン母ちゃんは閉店。しばらくすると、梶池亭レストランがオープンしました。

日本電気の敷地内に池があっても利用価値がないため、下ヶ戸が土地毎譲り受けていたのです。

西音寺の本堂再建も日本電気のおかげです。と西音寺の管理当番をされている方から聞いたお話でした。

取手の井野から小堀の分離で消えた村

大正3年(1914)利根川の大改修工事で分断され、元の流れは古利根沼という三日月湖となる。

取手町郷土史資料第二集や取手市史余禄を見ると、明治の利根川改修の際に消えた集落があるとの記述がありました。

大利根橋の近くから元宿、房田という部落がありましたが、今は川底、正確には土手下に埋もれています。

房田、大改修をする前、今の新道地先の河原には、房田(ふさだ、ぼうだ)という部落があったようです。

房田は十戸ばかりの小部落で、大改修の際それぞれに移転させられました。

取手には『房田の寄り合い』という言葉があったが、この部落は十戸ばかりの小部落だから「寄合(集会)」には出席率がよく話が早くまとまりそうなものだが、実に相違していつも集まりが悪く、話も仲々まとまらない。そこで取手では、集会を開いても出席が悪いと、『まるで房田の寄合いみたいだ』と笑ったという。

十二竈、大改修により、取手の発祥の地ともいうべき染野家が住んだ部落跡も水底に没し、いまは『十二竈(まど)』という地名を残すのみとなりました。

十二竈の『まど』は『かまど』の訛ったもので、『かまど』は戸、または軒と同義語で、いずれも家の数をあらわします。よって、『十二竈』といわれるところには、十二軒の家があったわけです。

この十二竈部落の鎮守は稲荷社で、十二竈が河底に没するとき台宿の東福院境内に移されたそうです。

取手町郷土史資料集を読んで見ますと、利根川改修の際十二竈はすでに集落はなく、地名だけ残っていたような印象を受けます。

台宿の東福院は、高野山金剛峯寺直末、現取手一高正門東側と相馬霊場廿番地蔵堂の後方にありました。更に栗山台に別院三階と相馬霊場31番札所を取手駅西口前の山林に建立し「取手八景」の名勝とした吉田村の資産家がいた様で、後に撤去され東福院は廃寺となりました。

元宿、一部が河川敷になった地区に元宿(もとじゅく)がありました。元宿は現在の土手を作るため、その一部が内務省に買上げられ、何軒かの家が河川敷になってしまいました。取手八坂神社の西側の道を河原に向かって土手を越し、川に向って行く途中に買上げられた人達の家があったようで、土手に慶応3年の鮭地蔵が現存しています。取手市史余禄より

【地名】日秀、此のお遍路コースには含まれない。

日秀(ひびり)地名の由来は伝説から始まります。

天慶3年(940)に平將門の死後霊が、現手賀沼である香取海を將門の七人の影武者とともに早朝騎馬で渡り、現在の日秀將門神社の川岸で朝日を拝した、と云われる由来で「日出る処(国)」から日秀と短絡的な伝承となっています。

更に、観音寺観世音菩薩縁起という古文書が存在していたらしいのですが。我孫子市史による。

日出弾正佐友治という家臣が此の地を守護していたが、村人たちからは平將門に似ず、腰抜けの頼りにならない弾正と「日出」を「日尻」尻は「びり」とも読むが「秀」の反対語でもある、ので「日秀」としたとか。日秀將門神社近隣に將門井戸もある。

日秀の秀にまつわる伝説は、もう一つあります。

平將門を追討したのは、同世代の従兄弟平貞盛と、不屈の古兵(ふるつわもの)藤原秀郷がいて、將門の急所のこめかみを射抜いた張本人です。あえて敵の名の秀を残したと云う。

秀郷には、俵藤太(たわらのとうた)という別名が江戸時代に創られました。江戸時代まで平將門は悪人で秀郷が善人という、現在と全く逆の解釈でした。

しかし浮世絵や歌舞伎の演目等では人気でした。

なお、日秀は、相馬霊場では、新木駅、葺不合神社、かまくら道のコース内でご案内しております。

鹿島日記抄、高田(小山田)与清(ともきよ)。

相馬日記の著者で国学者、相馬霊場を巡る会では郷州海道コースで紹介しています。

文政3年(1820)9月～11月までの鹿島詣日記より我孫子宿を抜粋してご紹介します。

江戸出発、金町、松戸、馬橋を経て小金宿に入ると雨が降りだし難儀、小金で宿をとる。だが翌朝も大風雨で終日止まず、宿泊延長となる。

九日天気晴れ、昨日迄の大風雨で大木が根こそぎ倒されて道が塞がれていた。

小金牧で草を食べる馬たちに見入ってしまう。小金牧には臙脂鹿毛(べにかげ)という霊馬がいると牧長は言う、だが捕えることが出来ない「賢き神馬」であるらしい。道端の篠生(ささふ)の中に小栗(ささぐり)が沢山実っていた。

「　ささぐりの　いがまじりなる　ささふをば
　　くひすさばすな　馬のくちとり　」

【臙脂鹿毛。臙脂＝えんじ、紅花の汁で染めた紅色。鹿毛＝かげ、赤褐色の競走馬。京都上賀茂社の賀茂競馬(くらべうま)は野生馬を二頭で競争させる勝抜き戦で宮中行事。妨害可、落馬失格とか。**】**

呼塚河岸で手賀沼を渡る。この沼は私の祖先の高田清が新田開発した二万石の処である。

我孫子の宿に入り一里余り行くと、利根川べりに出た。

「かなたには　棹さしくだり　此方には
　水脈(みを)ひきのぼる　利根の川船　」

利根川は川幅が広く、海を渡る心地がする。舟を降りて右に曲がると取手宿である。昼さがりに、我が師春海翁の教え子で、親友であった沢近嶺与兵衛を訪ねた。

「きのふまで　けふはあすはの　神にいのりて
　小柴さし　我はぞまちし　まつのやのきみ　」

井野の小堀に住んでいる寺田徳基勘兵衛を訪ねる。徳基は河岸問屋の商人で、江戸の三縄維直に漢詩を学び、風流に心を寄せていた。

此の夜「光源氏の帚木の巻」を講説する。

十五日晴れ、今日は鹿島へ行こうと別れを告げると、近嶺が一首詠んだ。

「おほがみに　まづたむけなん　いにしへを
　ふみみてとれる　あらこと玉　」

与清の返し詩

「かしま立　いそぐまぎれに　とりもあへぬ
　めさにかへてん　君がことのは　」

徳基家の船で利根川を下る。左右の岸に布川と龍ケ崎、布佐や竹袋、木下、安食さらに田川や滑川の里を見ながら下って行く。

【参考資料の案内】

『房総文庫４』に「相馬日記全」の項目があります。

『房総叢書第五輯改訂』の「房総叢書第十巻」に「鹿島日記抄」の項目があります。

「鹿島日記」は、国立国会図書館デジタルコレクションで『鹿島日記 古典籍資料』として公開されインターネットで閲覧可能です。

神社参拝に於ける二礼二拍手一礼は作法ではない

お参りの際に問題になるのが参拝作法。手水に始まる作法は神社仏閣どちらもほぼ同じで必ず行う辞令なのですが、唯一の違いは拝礼です。

「お寺では合掌のみ、神社は二礼二拍手一礼」というもの。でもこれ、古くから続く伝統なのかというとそうでもなく、明治初期の神仏分離令などの紆余曲折を経て比較的近年に定着させたものです。

昭和23年「神社祭式行事作法」が改正され、このときに祝詞奏上の作法は現行の「再拝→祝詞奏上→再拝→二拍手→一拝」のかたちに定められました。

現在、神社が参拝者へ説明している「二拝二拍手一拝」という作法は、この神社祭式行事作法に基づく新しいもので、しかも一般向けではありません。

また拍手の起源を見ると魏志倭人伝には倭(古代日本)の風習として「見大人所敬 但搏手以當脆拝」と記され、貴人に対しひざまずいて拝む跪拝礼(きはいれい)ではなく手を打って敬っていたと云います。

奈良時代には、持統天皇の即位の折、人々が手を打ち祝福した、という記述があります。

原文

皇后、即天皇位す。公卿百寮、羅列りて匝く拜みたてまつりて、手拍つ。(日本書紀巻第三十・高天原広野姫天皇　持統天皇　四年春正月戊寅朔)

このように、古くより日本独自の拝礼作法として、神様や貴人を敬い拝む時に拍手が用いられました。

平安時代から大陸との交流による影響で、宮中ではこの作法は行わなくなり、ただ二拝のみをするようになったことが文献からあきらかですが、神前の儀式では変わらず拍手が用いられています。

二礼二拍手一礼は、宮司や巫女等官職者に対する拝礼法であり作法心得で、受側としての作法心得であり、客側の参拝者の作法というのはおかしい…。

昔から寺社の僧や神官は「気軽に毎日でも参拝しなさい」が当たり前でした。

一般参拝者は自分にとって、最もしっくり来る方法で構わず、信仰心上の必要ある方には、推奨する作法に従うのが常だと思いますが。一般参拝者は、二礼二拍手一礼に、こだわる必要はなく、礼儀作法でもなく、従うものでもありません。

奈良時代からの神仏習合による寺社一体の歴史を明治政府により、神仏分離以降の寺社は別々の道へ歩み、古くからの日本の伝統を失いつつある現在。

神様への畏敬の気持ちがあるとしても、願掛けならば、古来の伝統方法の参拝で充分であり。堅苦しく考えず、気軽に寺社を訪ねましょう。

ただ、お寺であれ神社であれ、聖域に入る前に手水舎(ちょうずや)で俗世の穢れををすすぎ落す手洗いは是非欠かさずに実行してください。之は、神仏に対する最低限の禊(みそぎ)として、更に神仏界を聖域と分かっている人こそ、人間界との境界である「結界」を超えるときの礼儀で日本伝統の作法です。

日本の伝統が徐々に失われています。

2023/11/26

新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会資料